西武ライオンズ設立

1978

所沢の地に誕生した球界の新盟主。それまでのプロ野球チーム経営を革新

誕生から黄金期

1949（昭和24）年に起きたプロ野球再編問題によってリーグはセントラルとパシフィックに分裂。その際、パ・リーグに加盟した「西鉄クリッパーズ」が、現在まで続くライオンズの歴史の端緒となるチームである。福岡を拠点としたこのチームは、1951（昭和26）年に「西鉄ライオンズ」と名称を変更。“知将”三原脩監督のもと、中西太、豊田泰光、稲尾和久らの活躍で力をつけ、特に1954（昭和29）年からの5シーズンでは優勝4回、2位1回という圧倒的な強さを誇った。

しかし、1960年代後半からは“野武士”と呼ばれた主力選手の多くがチームを離れ、成績も低迷の一途をたどる。その後は経営難から経営母体・スポンサーが西鉄から太平洋クラブ、クラウンライターと目まぐるしく変わるが、チーム成績も経営も不振が続いた。これを憂えた当時のパ・リーグ会長は、それまでもプリンスホテル野球部の活動など、社会人野球への取り組みに意欲的であった西武グループにライオンズ球団の運営立て直しを要請。これに応えて国土計画（現・プリンスホテル）が、堤義明の決断により球団を買収、1978（昭和53）年10月、埼玉県所沢市をホームとする「西武ライオンズ」が誕生した。

その年末には、既に建設中だった新本拠地球場の名称を「西武ライオンズ球場」とし、ペットマーク、シンボルカラーも決まった。特に漫画家・手塚治虫の名作『ジャングル大帝』のレオをイメージキャラクターに採用したことは、プロ野球ファンのみならず、これまでにない球団の誕生を広く知ってもらうきっかけになった。

1979（昭和54）年の初シーズンから3年間は成績こそBクラスを脱することはできなかったが、他にはない球場の立地やアニメ「がんばれ!! タブチくん!!」の人気もあり、初年度からパ・リーグトップの観客動員数を記録した。

広岡達朗監督に指揮官が引き継がれた1982（昭和57）年には西武ライオンズとして初のリーグ制覇、日本一を成し遂げる。創設から4年目の栄冠は、大きなニュースとなった。その後、1985（昭和60）年までに3度のリーグ優勝を果たし、西武ライオンズが名実ともに球界の新盟主として認められるようになった。

1982（昭和57）年、初のリーグ優勝、初の日本一。西武の第1次黄金期が始まった

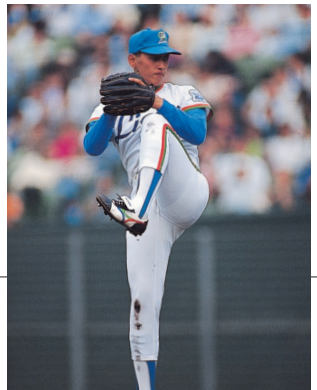
イメージリーダーとして

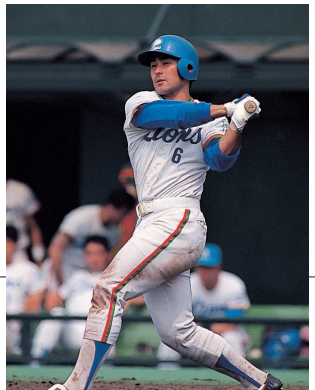
西武ライオンズのイメージ戦略は、それまでのプロ野球ファンの裾野を広げることに貢献した。西武園ゆうえんちに隣接している、西武ライオンズ球場（現・西武プリンスドーム）の立地を生かしたファミリー観戦という新たなレジャースタイルの浸透も、ファン層拡大につながっている。

グループに鉄道会社を持つ強みを最大限に活用している。西武ライオンズ球場でオールスターゲームや日本シ

電車内の中吊りなどに掲示されたリーグ優勝を知らせる「ライオンズニュース」

黄金期を支えた渡辺久信選手（左）と田邊徳雄選手（右）





西武ライオンズの5大トピックス

森祇晶監督

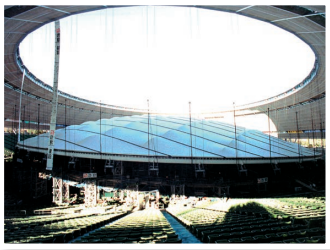
TOPICS 1　時代を築いた名監督たち

球界の盟主となり黄金時代を築いた西武ライオンズは、同時に数々の名監督を生んできた。初の日本一を成し遂げた広岡達朗をはじめ、9年間にわたりチームを指揮した森祇晶は実に日本一6回、リーグ優勝8回という記録を残している。データで見ると、1978（昭和53）～2007（平成19）年までの6人の監督で通算勝率が5割を下回るのは1人のみ。さらに特筆すべきは、このうち4人までが初監督で残した成績である。

1978（昭和53）年12月の田淵幸一選手の入団会見。左端は根本陸夫監督（写真：毎日新聞社）

TOPICS 2　記念すべき球場こけら落とし

西武ライオンズ球場のこけら落としとなった試合は、1979（昭和54）年4月14日の対日本ハム・ファイターズ戦。約20万通の応募のなかから選ばれ、入場券を購入できたファンは、ビクトリーロードから登場した選手を間近に見ながら初陣に送りだした。ちなみにこの試合は1対7で敗戦。こけら落としを勝利で飾ることはかなわなかった。


ドーム化第二次工事中の西武ドーム
（写真：読売新聞社／アフロ）

TOPICS 3　西武ライオンズ球場から西武ドームへ

1979（昭和54）年シーズンの開幕直前に「西武ライオンズ球場」が完成した。ファンにはおなじみであるが、勝利時に選手とハイタッチができる「ビクトリーロード」を設置するなどフレンドリーな球場として現在も親しまれている。1997（平成9）年にはドーム化工事に着工。1998（平成10）年には第一次工事として客席のみ屋根を設置、球場の名称も「西武ドーム」に変更。フィールドを膜屋根で覆う第二次工事は翌1999（平成11）年に完了した。

埼玉西武ライオンズ 球団ロゴ

TOPICS 4　西武ライオンズから埼玉西武ライオンズへ

より一層地域に密着した球団づくりを目指すべく2008（平成20）年、球団名を「埼玉西武ライオンズ」に変更。ライオンズはもともと地域に愛される球団を目指して運営してきたが、これを機に埼玉県の球団であることを明確にし、より一層地域に根ざした活動に取り組んでいる。名称変更した年の6月には県営大宮球場で初めて試合をおこない、ファンと地域に近いプロ野球チームとしての歩みを進めている。

ライオンズベースボールスクール

TOPICS 5　野球振興、こども支援

近年は、野球界全体の発展につながる活動にも積極的に取り組み、特に『野球振興』においては、野球新興国への球具の寄付などのほか、小中学生を対象とした「ライオンズアカデミー」「ライオンズベースボールスクール」で、未来のスター選手育成にも着手している。今後も、野球振興や社会貢献活動に積極的に取り組んでいく。

リーズが開催される日には、試合開始・終了に合わせて臨時電車を運転し、球場へのスムーズなアクセスを確保。1998（平成10）年には地下鉄有楽町線との相互直通運転も始まり、首都圏全域からの来場がますます容易になった。ライオンズ勝利の翌日には「ライオンズニュース」と題した中吊りポスターを西武鉄道の車内に掲示するなど、ファンへの情報サービスやファン層拡大にも活用した。

根本陸夫・初代監督が管理部長も兼任して球団中枢に参画し、実質的なゼネラルマネージャーとする経営手法は革新的なものとして注目されたが、そうしたこれまでにないライオンズの取り組みは、西武グループ全体のイメージアップにも効果的だった。現在も、西武ライオンズはグループ全体のイメージリーダーとしての役割を担っている。